

食を介して、子どもからおとなまでの居場所づくり

「ごはん+居場所 おかえり」

一緒にご飯を食べる。一緒に笑っておしゃべりを楽しむ。学校とも家とも違う、もう一つの場所。そんな場所が粕江市内にも増えてきているのをご存じでしょうか？その一つが、2017年から活動しているボランティア団体「ごはん+居場所 おかえり」です。

代表の宮川裕子さんは、2006年、ご主人の仕事に伴い、高知県へ。お子さんはまだ幼く、ご主人の仕事は忙しい。周囲に頼る人もいない状況で、子育てと向かい合う不安な日々でした。そんな悩みを相談することができるボランティア団体と出会い、「一人で頑張らない。困ったときは誰かに頼っていいんだ」と、気持ちが楽になりました。訪問歯科医でもある宮川さんは、2013年に家族で東京に戻り、高知での経験を糧に、生活困窮者支援のボランティア活動に参加。弁当配布や歯科相談会などを行ってきました。特に、小さな教会で長年行われてきた月一回の炊き出して、歯科相談のボランティア活動を通して感じたことが、何より「食事は大切」ということでした。

2017年4月、「訪れる人も出迎える人も、『ただいま』『おかえり』と言い合える、家のような場所を作りたいね」と、同じ思いを持ったママ友、高橋さん、若林さんと3人で会をスタート。「食を介して、子どもからおとなまでの居場所づくり」を目的に、NPO法人フードバンク粕江や粕江の農家さんの協力もあって、毎月第4土曜日に「ごはん会」を開催しています。食事の提供だけではなく、工作や手芸を親子で楽しむ時間も、回を重ねるごとに、リピーターも定着。高齢者と子ども、高齢者と子育て中の若い保護者など、多世代交流の場にもなっています。また、参加者がボランティアとして活動することもあるそうです。ある男の子に、「ここは変だね。だって、お店の

人も一緒に食べてるね」と言われたことがあるそうですが、まさに「共食」そのものです。ボランティアで参加する側も、参加できる時に来てもらえたら、と垣根も低く、無理なく続けられる雰囲気です。

昨年、新型コロナウイルス感染拡大により、活動が制限されてしまいましたが、何かできることをと、6月には過去3ヶ月のごはん会の参加者に往復はがきを55通送付。何か困ったことがあれば、各関係機関に繋がれるということとともに、子ども達に楽しんでもらおうと、なぞなぞを記載しました。そして、7月24日に、長らく中止になっていた「ごはん会」が1年半振りに帰ってきました。「子育ては親だけではなく、地域の皆さんとたくさん『共』を作ることとで、子ども達がより幸せになります」と宮川さん。お腹が空いていなくても、心がちょっと疲れている時に、「ただいま」と帰る居場所が地域にあると知っているだけで安心しませんか。

現在は、中央公民館で開催していますが、市内の便利な場所で、日常生活を味わえる古民家的な場所を探し、いつでも誰でも気軽に来られる居場所を作ることが今後の夢だそうです。

「おかえり」「ただいま」が響き渡る、そんな家が早く見つかるといいですね。



代表 宮川裕子さん

編集後記

今号は、お話を伺うだけではなく、実際に「おかえり」の活動に参加。高齢者、ひとり親家庭、不登校に悩んでいる家庭など、様々な環境の方々が交流できる居場所づくりを目指す宮川さんらの思いを、体験を通して更に感じる事ができました。そんな「ごはん会」体験の様子は、わつこ10月号内「こまえがおmini」でお読みいただけます。
(市川・斎藤)



おかえりHP